

## 資 料

大学体育実技ゴルフ授業における  
簡易スキルテストの試案安 部 孝  
東京大学教養学部New approach for evaluating golf skill in university  
physical education class

Takashi Abe

Dept. of Sports Sciences, College of Arts and Sciences,  
The University of Tokyo

本学では平成2年度より正課体育実技のスポーツ種目として「ゴルフ」が採用され、定員40名の授業が第2学年を対象に開講されている。授業はゴルフの正しい技術と、ルールやマナーの習得を目標に、駒場キャンパス内のグラウンド（フィールドホッケー場）を利用し展開され、ゴルフ履修者のうち希望する学生には東京大学検見川総合運動場内にあるゴルフコースにおいてラウンドレッスンを行なうことができるシステムをとっている（平成3年度後期からは検見川コースでの実習が授業時間の一部となった）。技術の学習過程では主にプラスチック製穴あきボールを使用している。すでに福永はこのプラスチックボールを用いたスキルテストを考案し、定量化したスキルポイントが1学期間の指導過程で改善されること、またこのスキルポイントと実際のラウンドスコア（検見川コース9ホール）との間には有意な負の相関関係が認められたことを報告している。このことはプラスチックボールを用いたスキルテストの結果がゴルフのパフォーマンスを反映し、一般学生のゴルフ・スキルの評価として十分に利用可能であることを示唆している。しかし、福永が報告しているスキルテストは優れている点が多いものの、テストの評価は熟練したゴルフ指導者が行う必要がある、現行の定員40名の授業では指導担当者が全員の学生を時間内（1コマ、90分）に評価するには指導上困難であり、また、ゴルフ経験の殆どない学生同志が互いに評価するには判定上難しい点がある。

本研究では現行の定員40名の正課体育実技においても十分に利用可能な簡易スキルテスト法を試案し、ゴルフのパフォーマンスとの関係について検討した。

方 法

1. 対象者

対象は火曜日3限（午後1時から2時30分）に体育実技の「ゴルフ」コースを履修した本学2年生43名（男子35名、女子8名）であった。種目選択に際し学生には、「ゴルフ」コースは初心者指導が中心でありゴルフ未経験を履修の対象にすることを説明した。授業は平成3年4月16日に種目登録が行われ、4月23日から7月23日までの14週

間にわたって実技が実施された。授業を実施したグラウンドは通常フィールドホッケー場として利用されている土のコート（約50×80メートル）で、学生は4名ずつの11班（11班は3名）に分かれ班単位で行動するようにした。授業初期はグリップ、アドレス、スイング動作の確認と注意点等について段階的に学習し、授業開始5週目からアプローチショットおよびパター練習を、9週目からはグラウンドにミニコースを作りゲームのやり方およびルールやマナーについての学習も平行して行った。なお、アプローチおよびパターの学習は実際のラウンド用ゴルフボールを使用した。

Golf Skill Test

Name (A) T. A.

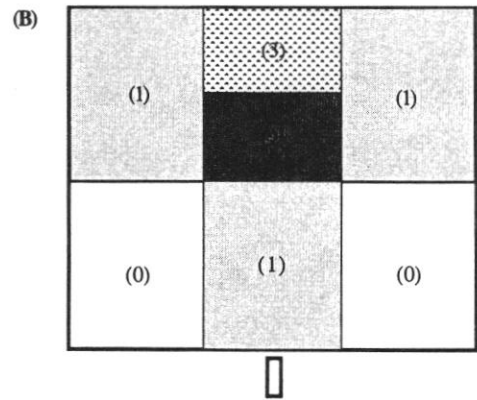
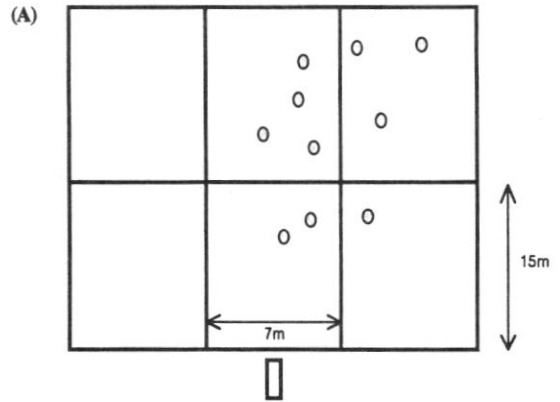


図1. 簡易スキルテストの記録表（例）と得点配分

2. 簡易スキルテスト

スキルテストは打球の方向やその性質（スライス、フックなど）から各自のスイング動作を理解させ、スキル向上につなげることを目的に行った。グラウンド上に図1に示したような幅7メートル、奥行き15および30メートルの格子状の白線を描き、幅7メートルの白線の中央部に打席（マット）を設置した。テストは2名一組で行った。一方の者はマット上からプラスチック製穴あきボールを10個連続してショットし、後方に位置したもう一方の者にはボールが最初に地面に接触した位置を記録表（図1A参照）に記入させた。スキルテストには全て9番アイアンを使用させた。学生にはフルショットで正確にボールを捉えることができれば、ボールは30メートル先のライン付近に落下することを説明・実演し、7メートル幅の前方30メートルラインを目標にショットするように指示した。記録表に記入された10球ショットの落下位置から図1Bに示したような配点で得点化を試みた。得点の配点は学生に知らせなかった。本スキルテストは軽いプラスチックボールを使用するため、フィールドテストとしては風の影響を受ける。スキルテストは実技開始4週目、7週目、10週目の3回実施したが、10週目以外は明らかに風による打球方向の変化がテスト結果に影響していると判断し、本研究では10週目の結果を採用した。

円内に停止したところまでの打球回数をスコアカードに記録させた。ミニゲームは実技開始9週目および11週目の2回実施したが、本研究では第2回目の結果を採用した。なお、男子学生1名はアメリカ遠征で欠席、女子学生6名については時間内に6ホール全てのプレーが終了できなかったため結果から割愛した。

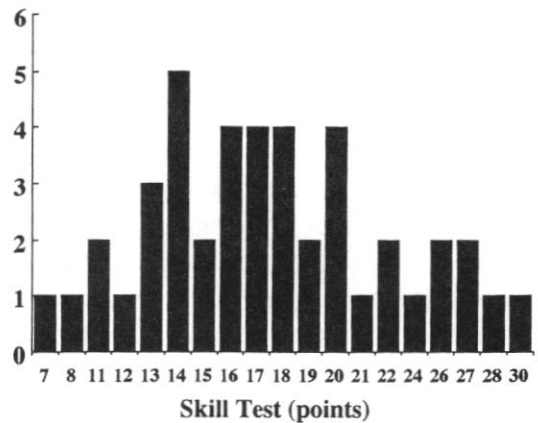


図2. 簡易スキルテストの結果とその分布

3. ミニコースによるショートゲーム

グラウンド上にミニコースを作り、ゲームのやり方およびルールやマナーの学習に利用した。石灰でグラウンド上にグリーンを想定した直径約3メートルの円を描き、円の中心から約30メートル離れた地点に打席（グリーン・マットを使用）を設けた。このミニコース（パー3）をグラウンド内に11カ所作り、4名単位で同じコースを6回プレーさせた。ショートゲームの条件として、第1打目（ティーショット）は全てプラスチックボールを使用し、第2打目からは実際のラウンドボールに必ず変えてアプローチおよびパターを行った。また、パターの使用はグリーンを想定した円内にボールが入った時点からとした。グリーン上（約3メートルの円）には直径約20センチメートルの小さな円（カップを想定）を作り、ボールがこの

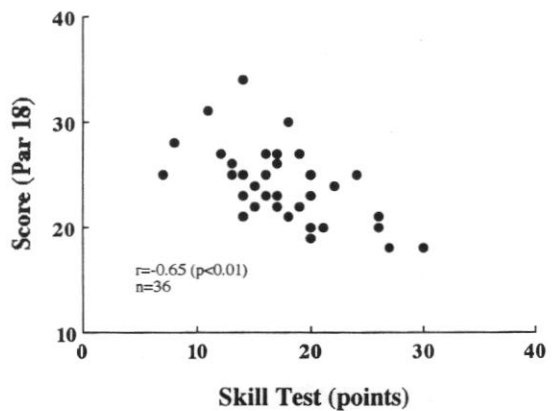


図3. 簡易スキルテスト得点とミニゲームスコアとの関係

### 結果と考察

簡易スキルテストの結果を得点ごとにその人数分布を示したのが図2である。得点の最も低い学生は7点であり、最高点は満点の30点であった。人数の分布は13点から20点の範囲に特に集中し、43名の平均得点は $17.7 \pm 5.3$ 点（標準偏差）であった。なお、女子8名の平均得点は $17.1 \pm 3.0$ であり、全体の平均得点との間に大きな差は認められなかった。

図3はスキルテストの得点とミニゲームによる6ホールスコアとの関係を示したものである。両者には有意な負の相関関係 ( $r=-0.65, p<0.01$ ) が認められ、スキルテストの得点がミニゲームのスコア（パフォーマンス）をよく表すものとして十分に利用可能なことを示していた。ミニゲームのラウンドスコアをグリーンにオンするまでのストローク数とグリーン上でのパター数に分けてそれぞれスキルテストの得点との関係を検討した。グリーンにオンするまでのストローク数とスキルテストの得点の間には有意な負の相関関係 ( $r=-0.64, p<0.01$ ) が認められた。しかし、パター数との間には有意な相関関係は観察されなかった ( $r=-0.28, p<0.05$ )。このような結果は、スキルテストの得点とミニゲームのスコアとの間に観察された有意な相関関係は、ゲームスコアのうちグリーンにオンするまでのストローク数をより反映したものと考えられた。なお、ミニゲーム6ホール（パー18）の平均ストロークは $24.1 \pm 3.9$ （範囲18~34ストローク）であり、1ホール平均4ストローク（1オーバーパー）であった。福永はプラスチックボールを用いたショットテストの結果と実際のゴルフコース（検見川コース、パー33）のラウンドスコアとの関係を検討し、両者に $r=-0.835 (p<0.001)$  という高い相関関係の得られたことを報告している。本研究では実際のゴルフコースでのスコアとの関係については検討できなかったが、グラウンドを利用したミニゲームのパフォーマンスとの関係は良好であった。現在、正課体育実技の学習過程による簡易スキルテストの得点変化、および実際のゴルフコース（検見川コース）におけるスコアとの関係を検討するとともに、簡易スキルテストの信頼性についての検討も進めている。

### 引用文献

- 1) 福永哲夫：一般教育ゼミナール（ゴルフ）授に関する実験的研究，東京大学教養学部体育学紀要 23：99-104，1989.